関西自然保護機構会誌 *25*（*2*）：*119－120, 2003*

北限のブナ林が活気付いていること（山科からの手紙6）

京都大学名誉教授　四手井　綱　英

Activated seedling regeneration of *Fagus crenata* trees in the northern limit of their geographical distribution. Tsunahide Shidei（*Emeritus Professor of Kyoto University*）

北限のブナ林の最近の様子について，来信があった。それは，平成14年3月間で小樽林業事務所の所員であった女姓からだった。彼女は私の口述した「森の人四手井綱英の九十年」の愛読者で，この本の95ページに，鳥取の氷ノ山のブナ林が近頃全く結実しない，従って後継樹が全く生えて来ないことから，地球の温暖化によって，すでにブナ林が北方に逃げはじめているのではないかと心配していることを記した。これを読んで，それとは全く反対に，北限のブナ林で有名な小樽のブナ林では，昨今元気が大変よくなり，盛んに結実して，天然更新も非常に盛んだと言うのだ。

ここに彼女（山岡雅代さん）からの手紙の一部をそのまま書きうつしておこう。

「小樽の事務所は古い歴史があり，明治時代に本州産のスギ，ヒノキ，アカマツ，ケヤキ等を持って来て，苗木を育て，どの樹種が北海道で植えられるかを調べるため，外国の樹種を含めて多くの樹種を植えている箇所があります（現在は小樽市役所が管理）。「小樽長橋苗圃公園」という名称になっています。

そこにブナも植栽されていて現在は大木となっています。[註：このブナ林は通称ガルトナーのブナ林と言われ，明治初期にドイツの宣教師が植えたものだそうだ。]

黒松内がブナの北限とされていますが，確かに今までは，小樽にあるブナは種が落ちても，発芽することはありませんでした。ですが，ここ数年天然更新をするようになりました。かなりの発芽率です。

小樽は自然条件も道南地方に比べれば，厳しい所です。四手井先生の言われる通り，ブナ林は北に移動しています。このことを伝えていただきたいと思います。」と言うわけだ。

そこで私は彼女にほんとにブナの更新が盛んになったかどうかは，少なくとも10年位は観察を続けなければならない，豊凶の差がはげしいから，さらにこの発言は調査して林学会誌に出してほしい，その方が引用しやすくなるから，と言う手紙を出したら，ここにあえて引用する2枚の寫真と，その他多数の寫真を送ってくれた（図1，2）。



図1．小樽のガルトナーブナ林.



図2．ブナの天然更新.